

パリ西郊の小高い丘、モンパレリアンでは毎年6月18日、第二次世界大戦中の対独抵抗運動レジスタンスの活動家を追悼する式典が開かれる。パリが独占領下にあった1940年のこの日、ドゴール將軍は亡命先のロンドンから仏国内の活動家に独軍への抵抗を呼びかけた。大戦中に少なくとも6万人が抵抗活動に参加し、2万人以上が死亡している。モンパレリアンには当時、独軍による囚人収容所があった。レジスタンスの活動

水説

sui-setsu

宮川 裕章



レジスタンスと神父

家を中心に1000人以上の銃殺刑が、ここで執行された。

独仏の暗い歴史を刻むこの地だが、二人のドイツ人神父の活動が、後の両国の和解の芽を育んだことは、日本でもあまり知られていない。収容所に派遣されたフランツ・シユトック神父(1904〜48年)は刑執行前の囚人に礼拝をささ

げ、危険を覚悟で囚人の家族からのメッセージを彼らに届けた。神父は青年時代に独仏の平和促進を目的とする運動に関わった経験があった。

囚人たちは、やがて最後の言葉を神父に託し、神父はそれを紙片に書き留め、家族に届けた。その姿を戦後、収容所の生存者たちが

証言している。処刑前夜、妻に渡してほしいと結婚指輪を神父に預けた囚人もいた。

フランス解放後、神父は仏中部のドイツ人捕虜収容所内で神学校を開いた。だが48年に肺を患い、43歳で他界した。翌年、銃殺刑に処せられた人の遺族が集まり、パリで神父の追悼式を開いた。

戦後、西独、フランスなど6カ国は石炭・鉄鋼産業を共同管理する欧州石炭鉄鋼共同体(ECSG)を設立した。資源獲得競争を制限

することで戦争を防ぐ構想で、現在の欧州連合(EU)につながった。一方で、フランス国民のドイツへの憎悪は残った。だが神父の活動が知られるようになると、両国のわたがまりが和らいだ。

63年、独仏友好条約が結ばれ、この時できた独仏青少年事務所の実業で、これまで1000万人以上の若者が相手国にホームステイし、草の根の信頼関係を築いている。戦争と和解を専門とするルー

バンカトリック大(ベルギー)の

バレリー・ロズー教授(国際関係論)は「神父の友情の記憶が、両国の関係改善に大きく貢献した」と指摘する。

モンパレリアンの記念碑にはナチスへの抵抗を呼びかけたドゴールの言葉が刻まれている。だがその陰で両国の友好を願ったドイツ人神父の活動を心に留めたい。戦火を交えた国民同士の和解は、小さな一歩から始まる。

(専門記者)

2026.6.17